

音読の高校生の発音能力に与える影響

The Effect of Reading Aloud on the Improvement of Pronunciation of High School Students

浅見 道明

Abstract

This study aims to investigate the effect of reading aloud and pronunciation instruction on the improvement of high school students' pronunciation. It also aims to explore an effective way of teaching English pronunciation. In this experimental research, two groups (a control group and an experimental group) were prepared. For the control group, listening comprehension practices were given. For the experimental group, listening comprehension practices were given and then pronunciation instructions and reading aloud practices were given. Results indicated that both subjects in the experimental group and the control group improved their performance in the same reading aloud tests to evaluate pronunciation that were administered at two months' interval. However, only the subjects in the experimental group made a statistically significant improvement in the mean scores of the tests. These findings provided empirical support for the positive effect of reading aloud and pronunciation instruction, especially an instruction of suprasegmental features, on the improvement of high school students' pronunciation.

1. 序

中学校や高校の英語授業ではいろいろな音読活動が盛んに行われるようになった。それに伴い、音読の読解に与える影響やシャドーイングの聴解に与える影響等が多く議論されるようになった。しかし、そもそも音読によって学習者の発音は改善されるのであろうか。このことに関する研究はまだない。そこで、音読の学習者の発音への影響と、さらに発音の何を指導すれば学習者の発音の改善につながるかを調べてみることにした。音読の発音への影響がわかれば、英語授業で行われている音読指導をどのように行うべきかを提案できると考えた。

2. 先行研究

2.1 発音の指導方法についての提案

島岡 (2004) では日本人の英語の発音を改善する方法として 10 段階発音指導を提案している。それは第 1 段階「挨拶とその音調」(イントネーション)、第 2 段階「マザーグースのリズム」(リズム)、第 3 段階「強勢とその移動」(ストレスとストレスシフト)、第 4 段階「母音」、第 5 段階「子音」、第 6 段階「語と語のつながり」、第 7 段階「子音連結」、第 8 段階「同化」、第 9 段階「弱化と脱落」、第 10 段階「効果的コミュニケーション」から構成されている。

また、Gilbert (1995) では “Traditional pronunciation teaching concentrates on drilling difficult sound distinctions, but both listening comprehension and speech clarity could be better served by using class time for training students to hear and use English signals of rhythm and melody.” とリスニングや発音指導ではリズムとメロディー指導が重要であると述べている。

Hahn (2004) では発音を改善するために非母語話者は suprasegmental features を学ぶべきであると言っている。また、英語の談話では新情報と対照情報が示されるので、特に primary stress の重要性を指導すべきであると言っている。

以上から、高校生は中学校ですでに英語の母音や子音については学んでいるので、超分節音素とそれに伴う音声変化を指導することが重要であると考えられる。

超分節音素とは竹林 (1996) ではアクセント、強勢、ピッチ、声調、リズム、イントネーションであるとしている。

そこで、島岡 (2004) の 10 段階発音指導を参考にして、リズム、ストレス、同化、連結、脱落、弱化、イントネーションを指導項目として選んだ。

2.2 超分節音素とそれに伴う音変化の指導方法

前述の島岡 (2004)、Gilbert (1995)、Hahn (2004) を参考に、発音指導に基づくリスニングデジタルコンテンツを 7 名の高校教師で作成した。そのコンテンツは 40 項目あり、子音と母音の分節音素とリズム、ストレス、イントネーションといった超分節音素までを含んでいる。

この研究では週 1 時間の授業で超分節音素と音変化を 1 つずつ指導することとした。その内容は以下の通りである。

1. リズム
2. ストレス
3. 同化
4. 連結
5. 脱落
6. 弱化
7. イントネーション

3. 実験

3.1 実験の目的

音読が高校生の発音の改善につながることを調べた研究はまだない。そこで、本研究では以下の仮説を証明することを目的とする。

- ・発音の超分節音素とそれに伴う音変化を指導しながら音読を行わせると学習者の発音は改善する。

3.2 被験者

国立高等学校の 1 学年 2 クラス 75 名を対象とした。さらに、75 名を統制群 (38 名)、実験群 (37 名) に分けた。

音読の事前テストにおいて、群間に差があるかどうか見るため、t 検定を行った。結果は有意差は見ら

れなかった ($t(73) = 1.48, n.s.$)。従って、統制群と実験群は等質であると考えられる。

3.3 方法

75名に2か月間実験を行った。週1時間のリスニングとアメリカ文化を学習する授業の中で実験を行った。この授業では World Times から出版されている Michigan Action English STEP 1 という全25レッスンの聴解のための教科書を生徒に持たせ、学習させている。教科書のストーリーは留学生の Tom がミシガン州アンアバーに1年間留学するというものである。生徒には教科書の他に教科書付属のカセットテープを渡してあり、自宅で聞き、問題に答えてくることになっている。統制群、実験群ともに、自宅および授業で Michigan Action English STEP 1 Workbook を学習させ、自宅での学習を確認するため、授業の始めに自習確認テストを行った。統制群、実験群ともに、一斉授業でパソコンとプロジェクターを用いて、Michigan Action English STEP 1 Workbook 以外の自作のリスニングデジタルコンテンツのリスニング問題の対話を聞かせ、その対話に関する問題を解かせた。さらに実験群には、リスニングデジタルコンテンツの発音説明のビデオクリップを見させ、リスニング問題の対話の SCRIPT (Appendix 1) を見せ、音読を行わせた。



3.4 事前・事後テスト

発音を測定するため音読テストを事前・事後テストとして行った。題材は誰でも知っている内容のものがテストに適すると考え、日本の四季を扱った島岡 (2004) の “Four seasons in Japan” を用いた (Appendix 2)。被験者に LL 教室で、ヘッドセットを付けさせて、“Four seasons in Japan” の SCRIPT を渡して一斉にカセットテープに音読を録音させた。テストの後に SCRIPT を回収した。

4. 結果

4.1 テスト結果

録音された音読テストは実験者以外の3名の高校教師の評価者によって評価された。各評価者は15点満点で音読テストを評価した。イントネーション、同化、連結等の発音チェックポイントを10箇所設け、

10点満点で評価し、さらに5点の印象点を加算した（ネイティブスピーカーの様な発音なら5点、発音が悪ければ1点）。

評価者間信頼係数は事前テスト $N = 77, r = .78$ 事後テスト $N = 77, r = .80$ [Spearman Brown Prophecy Formula] であった。従って、3名の評価者の評価は信頼できるものと考えられる。

事前事後テストにおいて、クラス間、および事前テストと事後テストの間に平均値の差がみられるかどうかを検討するため、二元配置分散分析を行った。表1はその記述統計量を示し、図1は各クラスの事前・事後テストの平均点の推移をグラフにしたものである。クラス要因は被験者間要因、テスト要因は被験者内要因である。結果は5%水準でクラス間要因に有意な主効果がみられた ($F(1, 73) = 6.740, MSe = 12.802, p < .05$)、試験要因にも有意な主効果がみられた ($F(1, 73) = 34.942, MSe = 1.168, p < .01$)。多

表1 音読テスト得点記述統計量

| | | N | mean | S.D. |
|-------|-------|----|------|------|
| 事前テスト | 統制群 | 38 | 6.07 | 2.74 |
| | 実験群 | 37 | 6.99 | 2.64 |
| | Total | 75 | 6.52 | 2.71 |
| 事後テスト | 統制群 | 38 | 6.52 | 2.59 |
| | 実験群 | 37 | 8.63 | 2.60 |
| | Total | 75 | 7.56 | 2.79 |

図1 音読テストの得点推移

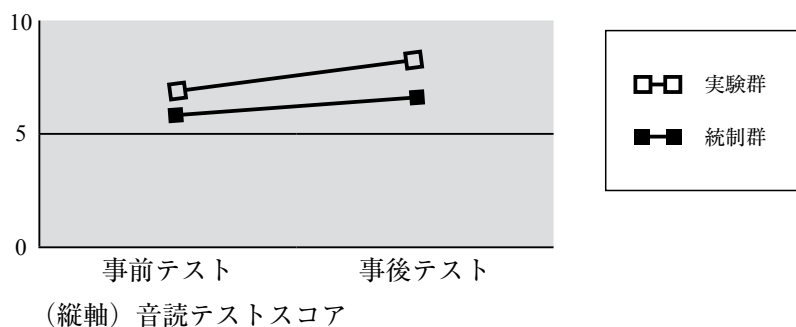


表2 分散分析表

| 変動因 | 平方和 | 自由度 | 平均平方 | F | |
|---------|----------|-----|--------|--------|-----------|
| 被験者間 | | | | | |
| クラス | 86.277 | 1 | 86.277 | 6.740 | $p < .05$ |
| 誤差 | 934.511 | 73 | 12.802 | | |
| 被験者内 | | | | | |
| テスト | 40.827 | 1 | 40.827 | 34.942 | $p < .01$ |
| テスト×クラス | 13.324 | 1 | 13.324 | 11.404 | $p < .01$ |
| 誤差 | 85.295 | 73 | 1.168 | | |
| 全体 | 1160.234 | 149 | | | |

重比較 (Bonferroni の方法) の結果、1%水準で有意差がみられ、事前テスト<事後テストであった。

5. 考察

実験結果は、超分節音素とそれに伴う音変化を指導しながら音読を行わせた実験群では事前テストのスコアと比較して、事後テストのスコアが伸び、統計的にも有意であった。しかし、音読を行わずリスニングのみ行った統制群では事前テストのスコアと比較して、事後テストのスコアはあまり伸びず、統計的にも有意差はなかった。したがって、仮説「発音の超分節音素とそれに伴う音変化を指導しながら音読を行わせると学習者の発音は改善する」は証明できた。今後高校生の発音改善には授業で音読を行い、その際、超分節音素とそれに伴う音変化を指導すると有効であると考えられる。

6. 今後の課題

本研究は約2ヶ月で行われた。学習者の発音改善にはもっと時間が必要である可能性があるし、2ヶ月以降に改善された発音が保持できるかも調査することが必要であるかもしれない。また、この研究は週1単位の授業の中で行ったが、学習者はこの授業と平行して週4単位の英語Iの授業も受けている。音読テストの伸びは英語Iの授業が影響していることも考えられる。また、学習者はMichigan Action Englishという教材を自宅学習しているので、その教材がテストの得点の伸びに影響していることも考えられる。これらの点から、本研究が純粋な環境で行われなかった可能性もある。今後はさらに環境を整えた実験を行うことが必要であると考えられる。

参考文献

- 島岡丘 (2004) 『日本語からスーパーネイティブの英語へ』 東京：創拓社出版
竹林滋 (1996) 『英語音声学』 東京：研究社
Gilbert, J. (1995) Pronunciation Practice as an Aid to Listening Comprehension. *A Guide for the Teaching of Second Language Listening* pp. 97-112 San Diego: Dominie Press
Hahn, L. (2004) Primary stress and intelligibility: research to motivate the teaching of suprasegmentals. *TESOL Quarterly*, vol. 38, No.2, Summer 2004

Appendix 1

A: May I help you?

B: Yes, please. I'm looking for something for my daughter. Next Sunday is her birthday.

A: How old is your daughter?

B: She's fourteen.

A: How about this ring?

B: Oh, that looks nice. How much is it?

A: It's \$300.

B: Well. I don't like the design.

A: Then, how about this bag?

B: OK. How much is it?

A: It's only \$200.

B: Let me see. That's a little too big.

A: How about this pen?

B: Can I have a look at it?

A: Yes, you can. Here you are.

B: How much is this?

A: It's \$100.

B: Let's see. This is a little too heavy. Oh. How much is this pencil case?

A: It's \$3.

B: Oh. This is perfect. I'll take it.

Appendix 2

Four Seasons in Japan

There are four seasons in a year—spring, summer, fall and winter. Each season has three months; March, April, and May are spring months.

In spring plants and trees wake up from a long winter's sleep. In April the cherry-trees are in full bloom. Parks are filled with people enjoying the warmth of the season.

In June the rainy season begins. The sky is overcast and we have very few sunny days for nearly a whole month.

Then summer comes with hot days and occasional showers. Boys and girls go swimming or mountain-climbing. The lakes near Mt. Fuji attract many campers. There they enjoy the cool air and the beauty around them.

In September typhoons hit, causing damage to buildings and crops. Yet, fall is one of the best seasons of the year—with its clear blue sky and fine cool days. The trees in the woods are colorful indeed. Here and there over the mountain slopes reddish maple leaves are seen even in the distance.

In December, the last month of the year, it gradually gets colder. But winter holidays are welcome! Housewives start to prepare for New Year's Day. In the New Year Season families go to shrines, visit their relatives and exchange greetings with one another.

Winter seems long, but when winter comes, can spring be far behind?

下線部がチェックポイント